

ら、

「君は近頃魔術を使うというひょうばんだが、どうだい。今夜は一つぼくたちの前で使ってみせてくれないか。」

「いいとも。」

わたくしはいすの背に頭をもたせたまま、さも魔術の名人らしく、おおようにこう答えました。「じゃ、なんでも君に一任するから、世間の手品師などにはできそうもない、ふしぎな術を使ってみせてくれたまえ。」

友人たちはみなさんせいだとみえて、てんでにいすをすりよせながら、うながすようにわたくしの方をながめました。そこでわたくしはおもむろに立ち上がって、

「よく見てくれたまえよ。ぼくの使う魔術には、たねもしかけもないのだから。」

わたくしはこういいながら、両手のカフスをまくりあげて、だんろの中にもえきかっている石炭を、むぞうさにてのひらの上へすくいあげました。わたくしをかこんでいた友人たちは、これだけでも、もうあらぎもをひしがれたのでしよう。みな顔を見合せながらうっかりそばへよってやけどでもしたら大変だと、気味悪そうにしりごみさえしはじめなのです。

そこでわたくしの方はいよいよおちつきはらって、そのてのひらの上の石炭の火を、しばらく一同の目の前へつきつけてから、今度はそれをいきおいよく寄木細工の床へまきちらしました。その

とたんです、まどの外にふる雨の音を圧して、もう一つ変わった雨の音がにわかに床の上からおこったのは。というのはまっ赤な石炭の火が、わたくしのてのひらをはなれると同時に、無数の美しい金貨になって、雨のように床の上へこぼれとんだからなのです。

友人たちはみな夢でも見ているように、ぼうぜんとして、かっさいするさえもわすれていました。

「まずちよいとこんなものさ。」

わたくしは得意の微笑びしょうをうかべながら、しずかにまたもこのいすに腰をおろしました。

「こりや、みなほんとうの金貨かい。」

あつけにとられていた友人のひとり、ようやくこうわたくしにたずねたのは、それから五分ばかりたった後のことです。

「ほんとうの金貨さ。うそだと思ったら、手にとってみたまえ。」

「まさかやけどをするようなことはあるまいね。」

友人のひとりはおそるおそる、床の上の金貨を手にとってみましたが、

「なるほどこりやほんとうの金貨だ。おい、給仕、ほうきとちりとりとを持ってきて、これをみなはき集めてくれ。」

給仕はすぐにいいつけられたとおり、床の上の金貨をはき集めて、うずたかくそばのテーブルへもりあげました。友人たちはみなそのテーブルのまわりをかこみながら、